「ひらく」は苫小牧の新しいローカルメディアです。
100％苫小牧のニュース、情報をお届けします。

税込 300 円

紙の街の小さな新聞
ひらく

第 17 号

2019 年 7 月 20 日号

特集 郷土の至宝ハスカップ（下）
～苫小牧の子供たちへの意識調査～

「ハスカップの木を見たことはありますか？」

苫小牧市民にとって、昔は当たり前にあったハスカップ。自生するハスカップが身近にはなかなか見られなくなった今、子供たちは「ハスカップ」について、どのような認識を持っているのだろうか。小中高生 100 人へのアンケートを通して見えたものと、これからの苫小牧のハスカップについて考える。

ハスカップの木「見たことない」が過半数

6月下旬から7月にかけて市内の小中高生に「ハスカップに関するアンケート」を実施した。場所は、市内中心部と東部の公共スペースでサンプル数は１００。小学生は高学年を中心に聞いた。

「ハスカップを知っていますか」という問いには、96％が「知っている」と答えた。小学生の中には「知らない」と答えた子もいるが、ほとんどが知っていると答えたのは、苫小牧ならではだと実感する。

次に「ハスカップの木を見たことがありますか」と聞いた。「ある」との答えが45％、「ない」との答えが55％だった。木を見たことが無い子が半分以上もいた。

「ある」と答えた子に「どこで見たの？」と聞くと「家に植えてある」「おじいちゃんちに行った時にあった」という声。

自宅や親族の家の庭以外でも「千歳にハスカップ狩りにいった」「白老で見た」という子もいた。「苫小牧で」という子はいないのだろうか。やっと「（東小中庭の）ビオトープにあるのを見たよ！」と小学生。

苫小牧で、当たり前のようにどこにでも自生ハスカップがあった時代、初夏には子供も大人も原野にハスカップを採りに行った。

その後、市街地拡大や工業開発で自生のハスカップは減り、１９８０年代前後には「ハスカップ」の木を開発地から移植する動きが出て、自宅の庭にハスカップがある家庭が増えた。かつて苫小牧の駅前商店街が開いていたイベント「ハスカップウイーク」でも苗木を配布。記者の家にはこの時のハスカップの木があり記者自身の「酸っぱいハスカップ」の記憶にもつながっている。

しかし、現在は自生ハスカップは身近な場所では見られなくなり、自宅の庭にハスカップの木を植えるということも少なくなった。昔と比べて、今の子供たちが「ハスカップを見たことがない」のも、不思議ではない。

ハスカップの味は？「甘い」派が6割

記者の記憶に残るハスカップは「砂糖で漬けても酸っぱい恐怖のハスカップ」。あの酸っぱさは勇払原

目次

特集 郷土の至宝ハスカップ（下）～子供たちへの意識調査～ …… 01-03
市議会６月定例会報 IR（カジノを含む統合型リゾート）議論 他 …… 04-07
水道は直営？民営？Pucca学習会、勇払で藍栽培の歴史学習他 …… 08-11
多彩な取り組み光る正光寺、昔語り 入谷寿一さん 他 …… 12-13
わたしの一冊 上田涼子さん、きらり ホタル通信 小嶋洋子さん他 …… 14-16
付録 胆振見聞録（4p） 皇太子来苫で大忙しの明治 44 年

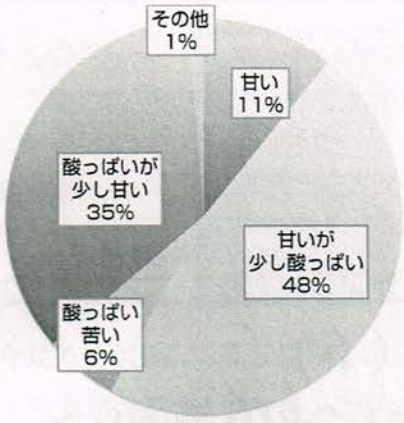
発行 紙の街の小さな新聞社ひらく
苫小牧市見山町 4-11-9
☎ 090(2092)1458 / FAX 0144(77)4800
mail gq-0-utz@mx31.tiki.ne.jp

野の自生ハスカップの特長だ。

「栽培種は酸っぱくないから、焼酎漬けは野生種が一番」。勇払原野の自生地でハスカップ摘みをしていた80代の男性は、そう語った。「今のハスカップはハスカップではない。すごくおいしいけど、別の食べ物だ」という声も聞いた。

酸っぱいハスカップは「酸っぱい、酸っぱい」と言われて時に嫌われながらも市民権を得てきた。それでは現在はどうだろう。アンケートで「あなたが思うハスカップの味は」と質問した。

「ハスカップを食べたことがない」と答えた子17％を除いた結果は左のグラフの通り。「甘い派」の子に、実のまま食べたことがある子は4割近くいた。店で売っていたものを食べたり、ハスカップ狩りで食べたという。ハスカップは改良に改良が重ねられ、甘みが強く非常に食べやすくなっていることが背景にある。ある男子中学生は「実を食べたいと思うけど、なかなか食べる機会がない」と「甘い」に丸を付けた。飲料水「い・ろ・は・す」ハスカップ味をたまに飲むと言う。

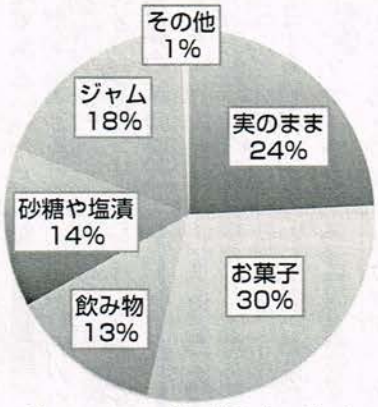


「ハスカップの味は？」

一方「酸っぱい派」の子は、実をそのまま食べていたり、砂糖漬けや塩漬けで食べた割合が6割強と高め。「おじいちゃん」や「おばあちゃん」の家に木があるといった話がよく出てきていた。原野のハスカップを知る世代が、今の子供たちにハスカップを伝えているのだ。

「どうやって食べましたか」の問い（複数回答可）は下記グラフの通り。小学生に「給食でハスカップゼリーが出た」と話す子が多く、給食の「食育」の力が大きいことを実感する。しかし、お菓子や飲み物などの加工品しか食べたことがない子が46％いた。

アンケートを通して分かったのは、「ハスカップ」そのものについては認知度が高いこと、しかし勇払原野の自生種に触れる機会は少なくなっており、「酸っぱいハスカップ」から「甘いハスカップ」へと認識が変わりつつあること、それでも、まだ「酸っぱい」ハスカップは親や祖父母から引き継がれているということだった。



「ハスカップをどう食べたか」

しかし、今後は分からない。ある男子高校生は「苫小牧の人の方が（市外の人より）ハスカップ、食べていないよな」と友達と話していた。ハスカップはいつから、そんな存在になってしまったのだろう。

民間では活発な活用
木を植える取組も

「ハスカップは厚真に持ってかれた」という話をよく聞く。「持っていかれた」というより、生産地という点で苫小牧では広がりにくかった背景に加え、役所も民間も協力してハスカップを盛り上げていこうと、まとまる力が厚真町に追いつかなかったということだろう。

とはいえ苫小牧では、菓子や健康食品としての開発、カフェでのメニュー化などハスカップに関する取り組みを積極的に進めているところは少なくない。

三星で使用するハスカップは勇払原野由来の美唄産だが近年、三星と関連する大東開発が植苗地域の38㌶の土地にハスカップ園の造成を進めている。勇払原野自生由来のハスカップの剪定枝を活用し、これまで2万5000本～3万本ほど植え5万本が目標という。「この苫小牧産ハスカップを、三星のお菓子の『よいとまけ』や『イヨマンテ』に一部使っているんです」と同社。

一方の市役所。かつて市緑地公園課にいた60代後半の職員に話を聞くと「ハスカップが1986年に『市の木の花』に制定され、市の庁舎にもプランターにハスカップを植えて飾っていたし、本庁舎の国道沿いの掲示板あたりの植樹帯にはハスカップを植えていた」という。

「それは大切な取り組みですね」と言うと「でも、いつの間にかなくなったんだ」。前号で取り上げた、学校のハスカップも同様だ。新しいものはどんどん作っていくが、もとからある地域の宝を「じっくりと育てる」のが苦手なのだということを改めて感じる。ハスカップをどうしていこうとしているのか市の方向性が見えないと前号で書いたが、「方

向性は何も無いのでは」という意見が寄せられた。市だからこそ、できることがあるはずなのに。

色々と考えを巡らせながら市サンガーデンの前（市立中央図書館の前）を通ると、ハスカップの木がある。数えると100本近くあった。

サンガーデンの指定管理者は2016年に苫小牧でもともと自生している植物を集めた庭「自生種の庭」を造った。「ハスカップは市の木の花に制定されていますよね。でも、見てみたいという時に見られるところがなかなか身近にない。それで、苗を移植してつくったんです」という。

植えたのは勇払原野の自生種だ。「市内で自生種を持っている人を探したり、枝をもらったりして、いろいろなところからいただいてきました。自生種はまだ、探せばなんとか手に入ります」。

サンガーデンの自生種の庭

この話を聞きながら、前号で取り上げた高丘森林公園の「ハスカップ園」に市が自生種を植えなかったエピソードを思い出していると、会話を聞いていた人が一言。「苫小牧市民の家の庭には一本、必ずハスカップの木があるというふうにすればいいと思うんだ」

文化としてのハスカップ
次世代に引き継ぐには

ここで、市民の意識の中でのハスカップという存在を考えてみる。

みちくさ研究所in苫小牧の代表の小玉愛子さん（元美術博物館主任学芸員植物担当）は2015年、美術博物館で手掛けた企画展「ハスカップ―原野の恵みと描かれた風景―」で、「ハスカップ」の存在の大きさを実感したという。

「見に来てくださった方一人ひとりがハスカップにまつわる思い出を持っていて、いろいろな話がハスカップへの想いと一緒に出てきたんです。（元三星社長室長の）白石幸男さんがハスカップは文化だとおっしゃっていますが、みんなでふらっと行って共有できる場があったという、『官』ではなく『民』の歴史の象徴がハスカップではないかと思います。苫小牧の人々にとって、ハスカップは『食べ物』や『産業』だけではおさまらないんですよね」と語った。

勇払原野の恵みと共に、市民に自然に培われてきたアイデンティティ。原野のハスカップに触れる機会が減ったという環境変化は、アイデンティティの継承が難しくなることとイコールだろう。

小玉さんは「『苦くて酸っぱいハスカップ』を受け止めてきた土壌が苫小牧にはあり、ハスカップは故郷への愛着、市民のアイデンティティにつながっているはず。こうしたハスカップに対する想いは形がないもので、消えていってしまうものでもある」とし、言葉を慎重に選びながら「私は、その中での自分の役割を考えているんです」と語った。

「どうしていけばよいのだろうか」と頭を悩ませながら、ある人と会った。ハスカップに関する活動に取り組むNPO法人苫東環境コモンズの草苅健事務局長だ。草苅さんは「ではどうしていくのか、ということこれからの話になると、難しいですよね。さまざまな歴史もハスカップへの贖罪も抱えながら市民はこれまで、ハスカップの担い手となってきたのだと思います。今回、ハスカップの市民史という一冊の本をつくりましたが、『ハスカップの市民史で一冊の本がまとまる』のは『ここ』しかないんですよね」と述べた後、記者に問いかけた。「これから、ハスカップの担い手はいるのでしょうか。担い手になりうるのは誰だと思いますか」。

勇払原野の自生ハスカップ

取材では、ハスカップに対するさまざまな人々の想いに触れた。例えば自生ハスカップを引き継ぐべきと考える人の中でも、微妙にニュアンスは違う。考えさせられることがたくさんあり、そのことがむしろ自生地の特性であるとも感じる。

矢代町の60代後半の男性は「酸っぱくて、えぐいハスカップを食べると『うわぁ酸っぱい、夏がきたなぁ、もう少しで樽前山神社まつりだ』と感じていた。身体に刻まれているんだね」と語った。こうしたふるさとの記憶を子供たちに伝えられたら―。そのための手立てを、考えていかなければならないのだろう。